

文科省に聞く!

「トビタテ! 留学JAPAN」 に見る高校生の海外体験

「トビタテ! 留学JAPAN」*1の高校生コースの担当者に
留学に飛び立つ高校生の様子や大学への期待などについて話を聞いた。

文部科学省
総合教育政策局
教育改革・国際課
専門職

加藤賢一

かとうけんいち ● 広島
大学大学院教育学研究
科修士課程修了。広島県
立高校教員を経て、2013
年広島県教育委員会指導
主事。2018年から現職。



Q 高校生を対象とした「トビタテ!」事業の状況は?

A 高校生コースの募集は、2019年度で第5期になります。第2～4期は500人の募集に対して2000人前後の応募がありました。合格者は女子が72%で、留学先はアメリカとカナダの2か国が45%を占めています*2。留学分野は、外国語習得メインの「アカデミック」、専門知識・スキルの習得をめざす「プロフェッショナル」、そして「スポーツ・芸術」、「国際ボランティア」の4つです。

第5期は、募集人数を800人に増やし、広報を強化しました。その結果、説明会に来場した保護者や教員の数は、前年の1200人から3100人と約3倍になりました。留学に対する潜在ニーズの大きさを感じました。

Q 留学後の高校生の変化は?

A 留学は、日常の居心地がよい「コンフォートゾーン」から、異なる環境、価値観の「ストレッチゾーン」に出て行く行為。いつもと違う環境でもがいてこそ、力が付くものです。ほとんどの生徒は、留学後の早い段階で語学や異文化への対応について力不足を痛感し、「プチ挫折」を経験します。しかしそれによって、コンフォートゾーンを抜け切れていないことを自覚し、本腰を入れて自分の置かれた環境と向き合い始めるようです。

高校からは、「受験勉強の時間が削られて不利になるのでは」とよく聞かれますが、実際は留学経験がエンジンとなり、学習意欲に火がつくことの方が多ようです。

特に発展途上国に留学した生徒は、社会問題への関心を強める傾向があるようです。社会にとって有意義なことをしていこうと、起業を志す生徒も少なくありません。

また、選考から漏れても、応募時の留学計画書の作成を通して、社会とどう関わるのか明確な目標を持つ生徒が多くいます。何のために、どこで何がしたいかを自分の言葉で語ること自体が、キャリア教育になっていると

言えるでしょう。

Q 事業を支援している企業は何に期待している?

A 支援企業が求めているのは、必ずしも英語力や評定平均値が高い人材ではなく、主体性があり、課題の設定・解決ができる人材です。「トビタテ!」の選考でも、英語力や学校の成績は問わず、好奇心、意欲、計画の独自性を基準に選んでいます。

そもそも、当初は大学生コースのみで始めた「トビタテ!」に高校生コースを加えたのは、「最初の留学経験が大学入学後では遅すぎる」という企業の声からです。特に大学生生活後半、専門分野を選んだ後では、将来への視野を広げようとしても自ずとその分野に縛られてしまいます。最初の海外体験は、なるべく幅広い選択肢がある早い時期に行うべきでしょう。

第4期からは、「プロフェッショナル」の留学分野に「未来テクノロジー人材枠」を設けています。プログラミング、制御技術など数理科学系の学修やインターンシップを留学先で行う枠です。国内のIT関連人材の不足のため、企業は質も量も上回る海外の人材で充足させている状態だそうです。数理科学系の分野でも今は、多様な背景を持つ人と協働できる人材が強く求められています。

Q 「トビタテ!」事業の今後の展開は?

A 事業としては2020年度の第6期でいったん終了しますが、それ以降も何らかの形で継続をめざしています。

また、1万人以上の留学希望者の背中を押してきた取り組みのエッセンスを、教育関係者が幅広く使えるように言語化したと考えています。「主体性を持って」「目標をつくれ」と言うのは簡単ですが、生徒に行動を起こさせるためには相応の技術が必要です。今多くの高校教員は高校生の留学を応援したいと考えています(右図)。こうした技術は、教育現場に不可欠なものだと言えるでしょう。

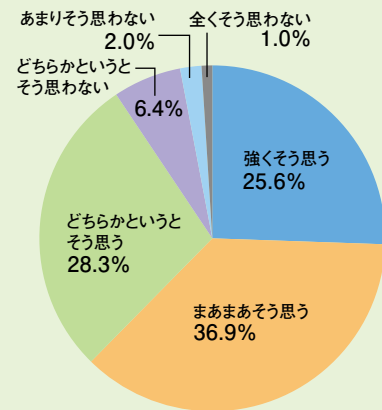
私たちは高校生がグローバル社会で活躍できるようにマインドセットの育成を心がけています。説明会では、最初に「大人を信じるな」ということを伝えています。社会変化の速度が増した現在では、過去の常識は通用しません。考え方や感性において「自分軸」を持ち、将来に向けて自分でルールを敷くことが大切です。

Q 大学の国際化についてメッセージを。

A 日本の学生は内向きと言われますが、留学に憧れを持つ学生は多いはず。大学にはその意欲を引き出す役割を期待します。

そのためには、ただ留学の間口を開くだけでは不十分でしょう。まず、自学に入学する学生が高校までに得てきた体験や、留学に対するモチベーションを理解する。そして、育てたい人材像を実現するために、学生にどんな体験が必要なのかを明らかにする。これらを経たうえで、質の高い海外体験の提供を望みます。

約9割の高校教員が 高校生の留学を 「応援したい」と回答



*[高校教師と留学に関する意識調査]
2018年5月「トビタテ! 留学JAPAN」調べ 高校教員407人回答

*1 「トビタテ! 留学JAPAN」は、民間からの寄附による給付型奨学金で世界に挑戦する有望な若者を1万人輩出する国家プロジェクト
*2 第2期と3期の集計値